

# ロシアの侵略 人間の尊厳認めぬ蛮行

筆舌に尽くせぬ残酷な人命喪失の実態が、断片的ながらも次々に明らかになっている。ただちに今も戦場に取り残された市民を避難させるべきだ。

ロシア軍がウクライナ東部で大規模な攻撃強化に踏み切る準備を進めている。激戦で壊滅状態になった都市マリウポリでは、すでに2万人が死亡し、なおも10万人以上が逃げ場を失っているとされる。

ロシア軍はこれまで、住民らが避難していた劇場や、産科病院を爆撃してきた。主要都市の制圧を急ぐ無差別攻撃でさらなる犠牲が心配される。

フランス、トルコ、ギリシャが共同で住民の救出を探っているほか、赤十字国際委員会も住民避難や物資の供給を提案している。だが、いずれもロシア政府は受け入れていない。

市民が戦禍にあえぐ地域で、中立的な国際組織の人道支援も

認めないのは非道というほかない。ロシアのプーチン政権は、戦争犯罪の露見を恐れていると疑われるのも当然だろう。

人間の尊厳さえ認めぬ蛮行は隠しようがない。ロシア軍が撤退した首都キーウ近郊では、凄惨な事実を住民らが証言し、現地から朝日新聞を含む国際メディアが報じている。

処刑、拷問、性的暴力、略奪などが、軍の占領下で起きたことは間違いない。住民がロシア系とウクライナ系とで選別され、後者が標的にされたとの証言も出てきた。

同様の報告は東部地域など各地から伝えられている。新たな総攻撃が始まれば、占領地で無抵抗の民間人にさらなる暴力がふるわれる恐れが強い。事態は極めて深刻である。

国連事務総長は「人道的停戦」を模索しているが、現時点では悲観的な見方を示した。ロ

シア指導部と対話のパイプをつなぐフランス、トルコなどは、改めて住民避難を実現するよう尽力してほしい。

キーウ近郊の町には、国際刑事裁判所の検察官が入り、戦争犯罪の捜査を進めている。何が起き、誰の指示だったかの詳細を明らかにする公正な調べを徹底してもらいたい。今後のロシア軍の行動を抑制するうえでも重要だろう。

プーチン大統領は今週の記者会見で、侵攻について「ロシアの安全保障のために始めた。他に方法がなかった」とし、ウクライナの「民族主義者とネオナチ」に責任を転嫁した。

異様な自己正当化の裏にあるのは、ウクライナを隷属的存在と見下す大国の独善である。大統領から軍への具体的な命令内容は不明だが、ロシア軍のふるまいにプーチン氏の思想が影響しているのは明らかだ。